

宇宙意志と地上の眼差しが共存する人

『谷崎眞澄詩選集 一五〇篇』に寄せて

1

谷崎眞澄さんの眼差しには、この世を駆け抜けていった美しくも哀しい行為をした死者たちの姿が刻印されている。また今まで振り返られることのなかった不遇であった死者たちの事実をあたかも伝説のように谷崎さんは書き残してきた詩人である。谷崎さんの詩的精神を語るためには、そんな純粋な魂を持つ死者たちが目指したことを解き明かし読み取ることが必要だと私には感じられた。その意味では谷崎さんの詩を読むことは、自らの死者に対する関係性を静かに問われていることになる。そして人間が生れ育てられた場所の原点とは何かを振り返らせてくれるもう一度、困難な自己課題に挑んでいく勇気を掻き立ててくれる。

初期の手作り詩集などは収録されていないが、谷崎さんの代表的な十二冊の詩集と未収録詩篇の一五〇篇を収録したこの詩選集によって、谷崎さんの一貫した本質的テーマが浮き彫りにされている。谷崎さんは一九三四年に札幌に生れた。祖父は徳島県出身で北海道に開拓するためにやってきた。谷崎さんの父は、生きるために道内で様々な事業を試み、谷崎

星座

いかなる季節にも 兄が晴れ渡った夜の星座と その伝説について語る時 その眼差しは優しさで憧憬に満ちていた僕にとつて独りの時の夜の星座は 単に美しいだけではなく 極めて畏怖に近いものであった いまにして思えば 兄が星座とその伝説について語りたかったのは 僕にであつたらうか『この位置からは南十字星は視えない』いまもなお 多くの記憶のなかに根を張っている言葉 兄にとつて この星座はそれほど重要な意味を持っていたのだろうか

僕が南十字星のよく視える位置を知ったのは 兄が戦死してから数十年後のことである 兄の乗った輸送船は 南太平洋で沈められた 何処へ向かっていたのか 数多く沈められた輸送船のなかの一隻に過ぎなかつた兄の船は――。

護衛船はついていたのか 何ひとつとして知らない 真つ暗な海原の果てでもない彼方に 数多く輝いていた星群れのなかに ひとときわ鮮やかに輝いていた南十字星を視たであらうか それとも船底深く身をひそめていたのであろうか もはや知るべくもない 激しい時代であつた

開闢岳の上空を 夜明け前に飛び立った 帰らざる戦闘爆

さんも戦後の混乱期には父の手伝いをしていたという。その後谷崎さんは日本大学で芸術学を学び、戦後の東京・板橋界隈に暮らした。帰郷して後は、縁あつて札幌市の職員になり、今では一般的だが、当時として珍しいケースワーカーとして多くの市民たちの様々な問題点を抱え込む仕事に着き、定年になるまで働き続けた。その間には、多くの悩みに寄り添いすぎて精神を病んだ時期もあつたという。谷崎さんは札幌の街の露路の隅々まで知り尽くしている詩人なのだ。谷崎さんの詩に多くの死者が出てくるのは、そのような社会の矛盾の犠牲者のような人びとと接する仕事上の背景があつたからだろう。また宇宙的な視点や自然との交流は、開拓者の祖父や事業家の父から学んだことだろう。

一九八九年に刊行された詩集『夜間飛行』の中の詩「根釧原野で」や「雪の記憶」によると、「人植地は山峡の傾斜地だつた」そうだ。祖父や父の北見への人植や「根釧原野」での「雪の記憶」が谷崎さんにとつて原点であり、北の大地の開拓に関わつた多くの人びとの生々しい記憶を谷崎さんは書き残そうとしてきた。それら北海道の大地に関わる詩篇と同時に、その北海道の遮るものがない天の星たちへ注がれる眼差しが、地球に暮らす人間を含めた命あるものへの親和感となつている。詩集『夜間飛行』の中に「星座」という詩があるので引用してみる。

撃機の乗員に うつすらとでも視えたであらうか
南十字星が――。

この星はグアム島からよく視えるという
北極星のようによく視えるという

南太平洋で輸送船が沈められて死亡した兄から教えられた夜の星座について、谷崎さんは「単に美しいだけではなく 極めて畏怖に近いものであつた」と語っている。兄が実の兄かどうか定かではないが、きつと夜空を見上げる時には、日本の歴史上でも最も不幸であつた兄たちの世代の戦死者のことを偲んでいるのだろう。兄が弟に教えることができなかつた「ひとときわ鮮やかに輝いていた南十字星を視たであらうか」と夜空を愛した兄へ感謝をこの詩に込めている。兄の眼差しに近づくことによつてこの詩は、読む者に死者たちの掛け替えのない固有な存在を想像させる。谷崎さんの詩の特長は、死者との共感を想起させながら、その「畏怖にも近いもの」に肉薄して視とどけようとするとする美意識が濃厚に感じられる。この世を構成するものは、宇宙(天)と地球(地)と地上の生きものたちと死者たちであるかのようなスケールの大きい宇宙空間が設定されている。谷崎さんにとつて人間は登場人物の一人に過ぎないのであり、人間を超えた眼差しで存在する例えば宮沢賢治の「宇宙意志」のようなものが根底に存在しているように考えられる。「宇宙意志」と「地上の眼差し」

が自然に共存している。そんな純粋な詩的精神が『夜間飛行』の全篇に貫かれているだけでなく、その後の多くの詩集の中にも宇宙から注がれる流れ星のように降り注がれている。この詩集『夜間飛行』には、戦後間もないころの「高級将校」などの初期の詩篇も収録されていて実質的な第一詩集であるように編集されている。この詩集には、死者と死に行く生者がいかに多様で豊かな関係を築くことが可能かという人間存在の困難なテーマが試みられている。たとえばタイトル詩の「夜間飛行」は、詩「星座」と同じ系列の詩篇で、戦争で亡くなった小説家や音楽家たちの危険を顧みない行動に畏怖に近い敬意を抱きながらも、残された家族の悲しみを語った詩篇だ。詩「斧」や「絞首刑」などの詩篇には、人間の殺意もたらす悲劇を殺人者と裁く者のたちの内面に肉薄しようとしている。また詩「死にかけている鳩」、「死化粧」、「死兎」、「旧道」などでは、死にかけている生きものたちや死んでしまった者たちに対して他者はどのような関わり方をしたのかを凝視し、死者への敬意を抱く生者の在りかたを感動的に語っている。詩「留萌海岸」、「根釧原野で」、「雪の記憶」などでは、北海道の荒々しい自然の中で、人間が他の生きものたちと等価であると感じながら、先祖たち開拓の記憶、開拓に関わった多くの労働者たち、流刑者たち、遊女に到るまで多くの死者たちの存在を甦らせようとしている。また詩「ありばいⅠ」、「ありばいⅡ」、「高級将校」などでは、北海道も日本も離れた

また正義感を誘導するマスコミ報道の在り方の偽善をも照らし出している。谷崎さんはジャズの名曲「ハーレム・ノクターン」の魂を搾り出すような響きとダブらせながら、場末で気高く生きようとした多くの民衆の姿をこの詩集に定着させようと試みている。

一九九二年に刊行された『秋の韓国で』の冒頭の詩「透視」には、様々な矛盾を抱えて生きざるを得ない現代人たちへ届ける言葉が、文明批評的に語られている。この詩を引用してみる。

透視

いのちが透けるころになつて
世界が人間が血縁が位置が視えてくる
とつくと失われた純粹感情を呼び戻したりなんかして
自分が正義のために生きてきたなどと思つ

すべてを捨てることなんかできはしないから
生きてゆくうえに

お愛想を言つたり譲つたり実に重大なことを譲つたりして
存在を認めてもらおうとする

己の意志のままに動きはしないことを
ずつと前に知つていながら……

他国の他者たちが、どのように愛する者と引き裂かれ戦争に加担してしまい、命を奪うことの痛みを喪失しながら無感動になつていく様を冷静に記述している。このように『夜間飛行』ではその後の谷崎さんの詩作の重要なテーマとなる詩篇群が収められている。

2

詩集『ハーレム・ノクターン』は一九九〇年に刊行された詩集で谷崎さんの代表作ともいえる詩集だろう。その中に詩「プライバシー」、「季節・季節・季節工」、「もうひとりの妹」などのケースワーカーの仕事を通して遭遇した孤独死や無縁死や過労死など「最近特に焦点が当てられてきた問題を、バブル経済時代の二十年前にすでに谷崎さんは書き記していた。好きな薔薇だけを相手にして誰とも関係を持たずに孤独死した男、役場には時々顔を出していたが家族からも絶縁されていて無縁死とされたアル中の女、出稼ぎに來た季節工が故郷に帰れず低賃金で働かされていつしか衰弱して過労死していく男など、現在社会の人間たちの生き死をリアルに記している。ただそれだけでなくその孤独死や無縁死や過労死が報道されることによつて、匿名の者たちが行政の関係者たちの対応の遅れを批判するといった構図の危うさも指摘している。その意味で谷崎さんは、行政の末端の現場で働く者として、固有の人間の善悪を超えた生と死の尊厳を語るようとしている。

世界は哀しみと苦しみの時間の繰り返しであり
星の瞬きのような生涯を送る
生は何故か飢えた地帯に多く
死もまた何処か似たところに多く
狙いは遠い戦争で勝利することであつた

生も死もハイテク技術のなかに抑えこまれ
水はなお澄もうとするのだが
樹林は消え
洪水となつて溢れるしかない

透けてゆく いのちは 透けてゆく季節のなかで
ひそかに咲いている花のなかに
ほっそりとした胸の美しい女神を視たいと思う
視ることができないと知つていながら――

いのちが透けてゆくととき
考えられるのは これくらいのこと

正義の実現でも
神の王国でも
ましてや政治ではない

透視はすでに終わっている

実に荒涼とした悲惨な歴史の歯車のなかで

透けてゆく いのちが軋む

骨も肉も

この「いのちが透けるころになって」と谷崎さんが呟いた頃は、第一次湾岸戦争の直後のころだった。アメリカ中心の連合国とイラクの戦争があり、日本も巨額の資金援助をして、実質的には戦争に加担していった。「世界は哀しみと苦しみ時間の繰り返しであり／星の瞬きのような生涯を送る／生は何故か飢えた地帯に多く／死もまた何処か似たところに多く／狙いは遠い戦争で勝利することであった」という三連目のそのことをさしているのだろう。その時の状況を谷崎さんは、いのちが軽くなるというよりも、「いのちが透けるころ」だと感じたのだろう。「透ける」とは、人間のいのちを真に見ようとするなら痛みを伴うはずだと言っているのではないか。人間の身体をレントゲンやCTスキャンなどハイテク技術を通して「透視」するように、物理科学的にいのちを「透視」することができるということはありえないと批判的に語っているのだろう。谷崎さんは、いのちには多くの宇宙や大地の時間が織り込まれているのであり、自然界の多様な影や光が満ちているのであると感じている。それゆえに人間の技術文明は大きな勘違いをしていると指摘しているのではないかと語っ

どの詩行には、人間のいのちが自然のちいさな魚はもろろん火山活動や山脈さえも、いのちという水を通して繋がっていることを「人生の或る局面」に実感したことが率直に語られている。谷崎さんの伸びやかな感受性の詩篇に私は心が洗われる思いを繰り返し感じている。

一九九七年に刊行された『雪の聖母園』の中の詩「母乳を流す女」は、とても感動的な詩だ。裏通りにある小さな居酒屋で、若いママが時折する身の上話を聞きながら、谷崎さんは焼き魚をつついて一人酒を飲んでいいる。そこで眼にした光景を次のように記している。「ふいに／「ちよつと待って下さい」／彼女は後ろ向きになった／彼女は 胸をほだけ／まあい乳房をだして乳を流した と思う／彼女は胸元をあわせてから振り返り明るくほほえんだ／まだ慎ましさを忘れない女がいる」。谷崎さんはきつとこの若いママが流産した子かどこかで母を待っている子の存在を思い描きながら、生きるために必死で働いている若いママに聖母をダブらせていたのだと思われた。

一九九九年に刊行された『異変』の中の詩「異変」や「死にゆく語り部は世界に満ちて」などを読んでみると、谷崎さんは現代の科学技術文明の危うさを直視した、本格的な硬派な詩を書き得る詩人であることが分かる。「異変」はチエルノブイリ原発事故がその地に生きる人にどんな影響を与えているのかをリアリズムで記している。同時にその果ての日本の

ている。そして本来的な「透視」とは人間たちが行ってきた「悲惨な歴史」を見抜くことから始まることを指摘している。「透視はすでに終わっている／実に荒涼とした悲惨な歴史の歯車のなかで／透けてゆく いのちが軋む／骨も肉も」という最終連の四行は、現代文明の在りかたを根源から問うている心に刻まれる詩行なのだ

3

一九九四年に刊行された『樹木』には、残された北海道の自然からいのちを感じ取るだけでなく、そのいのちが「ちから」となり自己の肉体や人間の暮らす街に繋がっていることを確認していく詩篇。詩「樹木」の一連目を引用してみる。〈薪紙と樹の家 箸 船 橋……／そういうものになった樹に「ちから」がある〉というように自然の「ちから」を発見することの大切さを気付かせてくれる。

一九九五年に刊行された『人生の或る局面』の詩「例えば・水への憧れ」などを読んでみると、谷崎さんの自然は、大和的な温和な自然ではなく、もつと荒々しい地球規模の厳しい自然を包み込んだ自然を視野に入れていることが分かる。その詩の中に出てくる詩行を引用してみる。「一本の樹木によりかかっていると／自然のほうから寄ってくるのではないか／水の きらめきのなかに／姿を落としている火山／ゆらめいている ちいさな魚たちの俊敏さ／遙か遠く連なる山脈」な

未来がチエルノブイリのような世界になることを次のように予言しているのだ。「いつのまにかわたしたちの住んでいる島は／原子炉で埋まっている／島は いつも船のように揺れることがある／そして 核燃料は見えない／匂いもない味もない／いつの日にか原子炉は ひびわれた石棺になる／わたしたちの時代の明確な歴史は／黒い雨のなかにあり／そのなかに／首をとおしているの知らない／原子炉も核爆弾もそう変わらない／放射性廃棄物も／わたしたちは／ふかくふかく切れ込んだ活断層のうえに／すべりおちて行く／すべての消息は不明である」。日本列島という揺れる船に乗る日本人にとって、果たして原子力発電を維持し拡大することは、自殺行為であるのではないか、と谷崎さんは冷静に語っている。しかしそれでもやり続けるなら活断層に隙間に私たちは滑り落ちて行く覚悟を持たなければならぬことを明らかにしている。

二〇〇二年に刊行した『喪失』の冒頭にある詩「喪失」は、「父親に買ってもらった時計を／プールの脱衣場に忘れてきた」少年の喪失感を書いたものだ。谷崎さんは「時計を失うことによって／そのひとは物といのちの双方を確認したのだ」といい、その喪失感を深めていく。そして物を所有するとは、物を生かそうとして手渡ししてくれた人の思いを引き受けることであり、本当の喪失とはその期待を裏切ることだと語っている。

二〇〇三年に刊行された『リラの花咲く樹の下で』の詩篇には、魂の深みに達する詩篇が数多く現れてくる。例えば詩「見えない吊り橋」を引用してみる。

見えない吊り橋

ひととひとの間には
いつも揺れている
見えない吊り橋が架かっているという
それがどんなに親しい者たちの間でも
例外ではなく
その吊り橋は音たてて揺れることがある
だからひととはひとに顔を見せるとき
笑みを浮かべるが
そのとき
吊り橋が
浮かび上がってくるのだ
そして ひととはひとのところへ
たどり着こうとするのだが

うづくまる。しかしマスコミは関係者たちにマイクと言う牙を向け続けて死者の惨劇を興味本位に暴き続ける。そんな不可思議な光景に谷崎さんはあえて詩作で応えようと挑戦している。この詩集には「場所」という詩があり、身近な自然や地球環境を破壊し続ける現代人の危機を指摘しているだけでなく、現在人の魂の在りかを書き記している。

場所

ひとは己の場所を
分かっているようで分かっているわけではない。
その場所が
いつのまにかずれていることについては
まったく分かってはいない。

ひとの意識のどこかで
芽生えている
身動きの取れなくなった者への
冷やかな視線
場所が何処にも無くなっても
木の実が成る木が

「吊り橋を
渡り切った者はほとんどいないのだ

この「吊り橋」は短い詩だが、我と汝の関係を考えさせる魂の深みを感じさせる詩篇だろう。近くの他者が本当は遠い存在で、その間にはいのちがけの吊り橋が架かっているのだという。真に他者に関わるとは、その吊り橋を渡らなければ出会うことはない。その吊り橋とは、二人をつなぐ言葉かもしれないし、二人をつなぐ時間もかもしれない。他者にかかわることの困難さだけでなく、出会いの憧れを秘めた魅力的な詩篇だと思われる。

二〇〇五年に刊行された『移動と配置』の同タイトルの詩には、トナカイの静けさと従順さを愛した谷崎さんは、かつて父に同行して狩をした風景が、痛みとなってよみがえってくるのだろう。トナカイの「そのような生が／かがやいていると思うことがある」という。「五千年も六千年もかけて」移動し配置されて、谷崎さん親子のそばまでやってきて射殺されたトナカイの宿命とは何かを考え続けている。

二〇〇七年に刊行された『斧を投げ出したラスコーリニコフ』は、マスコミから伝えられる殺人者の惨劇の報道が一日たてば忘れられてしまうことの荒涼とした現代人の精神性を暴いている。現代のラスコーリニコフたちは、自分のやったことに自覚的ではなく、その惨劇に怖気づき斧を投げ出して

あると思っている。

数知れぬ資本は
河を走りながら河幅いっぱいを使って
奔流となって荒れ狂っている。

ひとが
場所を失うとはこのことである。
爪先立って場所を失うのである。

夜明けにも真昼にも……真夜中にも
世界中の場所という場所が
失われる。

ひとつの場所を
失うことは
すべての場所を
失うことである。

二〇〇九年にも詩集『カナリアは何処か』が刊行された。カナリアは深い炭鉱で炭鉱夫たちの危機を知らせていたという。現代において駐車場に閉じ込められた幼児が熱中症にかかって火あぶりのように死んでいく、留守番している幼児三

人が焼け死ぬ前に、どうしてカナリアは知らせてくれなかったのか。人間はどうして内なるカナリアに気づかないのかという思いを谷崎さんは静かに語りかけくる。また「空爆」の連作六篇（うち五篇を本詩選集に収録）も戦争の悲劇の根源を後世に伝えてくれて力作だ。これほど内なる精神の深みから現代社会の多様な社会現象を引き受けてエネルギッシュに書き続けている詩人は数多くはいない。谷崎さんの詩作の全貌を多くの人びとに知って欲しいと願っている。